

子どもの質問について

西南学院短期大学児童教育科 高橋 さやか

子どもの質問について、母親にアンケートを求め、質問の種類、追求度などを明らかにすることにより、心理的発達的一面を知ろうとした。又、母親の答え方と子どもの質問の発達度及び発展の方向との相互関連をできるだけ確かめたいと試みた。今回の資料となったものは、西南短大附属幼稚園関係の百十四通と、施設に関係しない一般よりの三十八通である。

1、年齢と質問

今回の資料となったものは、一人乃至四人の子どもをもつた母親たちのアンケートであって、子どもの最低年齢は二才、最高年齢は十三才になっている。年齢と質問とをばっきりあげたものについてみると、

二―三才の子どもについて記したものの二名、三―四才十八名、四―五才七十二名、五―六才四十八名、六―七才八名、七―八才八名、八―九才二名、九―十才一名、十才以上五名、であって、年齢を記さなかったものの若干名があるが、それは大体四―六才の間と推定され

る。資料の提供者が大部分幼稚園児の母親であるから、自然に四―六才児の件数が多くなったのではあるが、兄妹全部についてかうしたものの（出題の折に特にそれを依頼してある）が約七〇%を占めているのに、その割合としても、四―六才児についての件数は多いのであり、母親自身、六才以上になると以前のように質問しない、と答えているもの約三〇%、これに対して、九、十才になって非常につっこんで詳しくききたがるようになった、というもの七%であるのを見て、少くとも、「母親がよく気がついて、答えてやるような質問」を、最も多くするのが、四―六才であることが知られる、といえると思う。

質問の内容を見ると、

二―三才児は、手にふれたもの、見たものについて、「何」ときいており、二名とも、絵本を指して何、どうしているの、ときいたと記している。

三―四才児も全部、何、ともの名をきいており、十八名のうち十一名までも、どうして、何故、とわけや由来をたずねた、と記し

ている。但し、一人一人の子どもについてみると、何、ときくことの方が、どうして、ときくことよりもやはり多いものごとくである。四一五才児は、もの名をきく、というのもあるが、より多くわけや由来をきく、としたものが、約八〇%に（四一五才児のみについて）のぼる。しかし、ねほりはほりどこまでもきく、というところに記したものは案外に少く三〇%くらいである。五一六才児のうち二〇%ほどはまだ、何、という質問を記しているが、殆ど全部、わけを詳しくきく、の項を肯定している。

四才までは、見たもの何でもについてきく、というのが多く、四一五才児のうち約六〇%は草花についてきく、ということあげ、犬、猫、鶏、牛、馬、など身近な動植物への関心が強いことは、五〇%以上の母親がみとめている。草花の方が、やや上廻っているのは、手にとり易いせいであると思われる。動植物のそれよりやや少く、見えなくて存在がわかるもの——ラジオの声、風、などについて、また自然現象——雨、雷、虹などについてきくこともあがっている。五一六才児では、ものなりたち、構造を知ろうとする傾向が目立っている。そうしてどうなるの、それから、等いわゆるねほりはほりが最も顕著であるのもこの年ごろの如くである。更に、意外の多数四十八名中十九名——約三九%強が新聞のビッグニュース、放射能とかストライキとか、火事、衝突、等についてとりあげているのは注目させられた。しかも、母親が気にもとめすぎながすことも考えられるから、実際に子どもがそれらに抱いている関心度はもっと上廻るものとみていいと思う。学令未滿、そして、比較的平穩な都市住宅街の子どもにして、社会問題は子どもの身邊に強く迫

っていることが知られるのである。

六才以上については件数が少ないので、これだけでは何をいうことも出来ないと思うが、七、八才くらいまでが、自然物や、機械器具について関心度がつよく、八、九才から十一、二才へかけて、平和とか、正義とか、公衆道徳とか、信仰、とかいう問題が出てきている。信仰といえ、資料の出所の母胎がクリスト教幼稚園であるので、四一六才児に、神についてきくというのが出てはいたのであるが、これはむしろ子どもの方で、わからないことの解答としてはじめから神をおいており、神について本当に考え、疑問を出すのは、八、九才以上になると見られるのである。

十一才の子と十二才の子について、何か考え疑問をもっているらしいが、質問はしないというのが一件ずつあった。ひとにきくよりも自分で考える、という傾向があらわれていると見るべきであろう。

2、母親の答え方について

質問によく答えるか、という問に対し、よく答える、と記したものの五五%、あまり答えてやれない、と記したものの二〇%、大体答える、という程度のもの二五%、である。記入状態から判断すると、とにかく熱心に答える努力をしているものは、本人がよく答えているつものものより少し下まわるようで、結局よく答えるもの四五—五〇%、おおよそのところ、で答えているもの三〇—四〇%、一〇—一五%が、殆どつ放す、と見られようか。

母親が答えに困ったとしているもの、科学的知識が及ばないとするもの五五%、それに重っているものもあるのであるが、むづかし

いことをわかるように説明する説明のしかたに困る、というもの四五%、答えを憚る(性の問題、複雑な人事関係の問題)もの二八%、他に若干、子どもの真意がつかめない場合、意表をつかれて絶句する場合、があげられている。

面白いのは、よく答えてやる、ものと、答えるための知識の不足を感じるものとは正比例しており、子どもの質問の多様性もまたこれに従っていることである。これに対して、きいていることには答えている、と記したものに、困った質問なし、とあるのは、答え方が一応で浅いために、子どもがあまりきかないのではないかと、察せられるものがあることは統計的に確度が高いとはいえないが、事実であるといえよう。資料のうち商家の子どもは比較的少いのであるが、その約半数が忙しいのであまりかまってやれない、と残念がつている一方、子どもの方では、ねほりはほりきく、というタイプが多かった。ラジオや、時計、玩具の構造をきく、というものも、多く含まれている。

Finger Painting に就いて (I)

— 発達面における一考察 —

大阪市立大学

小 西 勝 一 郎
並 河 信 子

と、答えても、殆ど答えなくても、子どもは大体においてよくものをきく、ということである。それが、四―五才を頂点とし、何、という名をきくことから、一とおわりわけをきく、という時代が最も盛んであり、しかも、子どもの成長にとって大切なことは、答そのものよりも、納得出来るか出来ないか、という心もちの問題である、ということである。そして、納得のさせられ方が、浅くて簡単である、と、発達度は少く、答そのものは不完全な答であったり、又は、いっそ答えがなくて、子どもが自分で納得しようと努力する余地がこのされている場合の方が、発達度は高い、ということがいえる。つまり、子どもが質問することは、子どもが自分でもととしていえる解答をたしかめよう、としている傾向が多分につよいことであり、それは、青年期に入るところにもちはじめ、本当の真理の探求の態度とは、稍ちがったものであるかもしれない。かなり主観的なのである。しかし、やはり、これらの質問にまじめに対応することが、後年の真の研究心の土台となることは言うまでもないし、おろそかに出来ないことも論をまたない。